

【5】 両部習合灌頂次第

写本1帖

〔書名よみ〕りようぶしゅうごうかんじょうしだい

〔著編者〕未詳 〔写刊年次〕江戸後期

〔外題〕ナシ（題簽あり、摩滅）

〔内題〕両部習合灌頂次第

〔その他題〕ナシ

〔残欠状況〕全 〔保存状況〕小破（糊離） 〔装訂〕折本装 〔丁

数〕三五丁（両面墨付） 〔本文用字〕漢字 〔一面行数〕六行

〔表紙〕鶯色・布地 〔法量〕縦一六〇糎×横九・二糎 〔料紙〕斐

紙（間似合） 〔界線〕押界（界高一三・三糎／界幅一・五糎） 〔書入〕

朱書注記（首頂点・合点・句切点） 〔印記〕ナシ 〔備考〕諸師2

函46。表紙見返は箔散らし。

〔奥書〕（巻末・裏面）

〔朱書〕「天明八申師老十六日写之終

伝燈大阿闍梨権大僧都法印文濟（花押）」

御流神道玉水流従第二世文濟

法印第六世之資

妙海校正了

〔解題〕

本書『両部習合灌頂次第』は、真言寺院において執行された灌頂儀礼に関する次第書であり、仏教の諸尊と神道の諸神を習合させた形で修法された神祇灌頂の次第を詳細に伝える。本文は両面墨付で、表面に「両

部習合灌頂次第」、裏面に「神祇灌頂後夜作法」「神祇灌頂初後夜法則御流」「誠語」を載せる。

奥書に示されるとおり、御流神道玉水流の流れを汲む京都・西福寺第二世・文濟が天明八年（一七八八）に書写した次第書を、のちに妙海が相伝し書写校合した伝本である。おそらくは、津軽弘前の最勝院第三十三世となる妙海が西福寺住職兼務時代（一八六四―六七）に伝授書写したものと推察される（前掲【4】『神道護摩私大事』解題中の系図を参照）。その点、本書もまた西福寺における御流神道玉水流の断絶と復興の軌跡を直截的に遺した資料として位置づけられる。

円覚寺への伝来過程を示す識語は見受けられないが、他の御流神道玉水流関係資料が、いずれも妙海より尊岸もしくは義観に伝授された経緯に鑑みると、本書もまた一連の神道伝授の一環として原本さながら相伝された蓋然性が高い。津軽における最勝院―円覚寺のネットワーク（宗教ネットワーク）が、真言宗ともども幕末明治期における神道の拠点としても機能していたことを示唆する貴重な資料である。

なお、円覚寺には別にもう一本『両部習合灌頂次第』（諸師4函37）が伝存している。こちらは江戸中期ごろの写本とみられるが、内容もいたって簡略であり、本書との関係性は判然としない。奥書を有さないが、巻末に以下の識語がある。

今日

一於神道灌頂宮内ノ作法等両説有之見ヘタリ

天正年中ノ古キ次第ノ通ヘ受者引入後…（後略）…

あるいは妙海が校合に用いた異本の可能性も否めない。伝来経緯と併せて後考を俟ちたい。

〔参考〕

・特設展示「南山城井出町西福寺神道灌頂資料」（国文学研究資料館、

二〇一四年)

・シンポジウム「南山城と神道灌頂―井出町西福寺所蔵資料をめぐる」(『仏教文学』第四一号、二〇一六年四月) 所収、中山一磨「西福寺の歴史」／向村九音「西福寺と椿井文書」／伊藤聡「西福寺の神道灌頂」／鈴木英之「神道灌頂道場図の復元」

・HP「橘氏ゆかりの御寺 遍照山西福寺」 <http://henjozan.xsrv.jp/>

「神仏習合…玉水流について」

<http://henjozan.xsrv.jp/category5/entry10.html>

「神仏習合…玉水流法脈」

<http://henjozan.xsrv.jp/category5/entry11.html>

・『最勝院史 図版編』壹・貳(最勝院史編纂委員会、二〇一〇年)

・『寺院文献資料学の新展開』第一〇巻『神道資料の調査と研究Ⅰ 玉水流特集』(伊藤聡・編、臨川書店、近刊)

(原 克昭)

西部習合灌頂次第 何闍梨

先入神力妙壇再拜 取幣并
 頌曰謹上再拜、八相成道結緣始
 和光同塵利物終
 次登床 先置幣本取而後登



系結 合藥 金剛奉日 壇系二節 謹尸且 大且科
 灌頂當日其露日定 囉音考吉日始
 大所入堂之時草カク 檀扇 水稽念珠 法服袈裟裝
 教受本儀、法服七條草カク 迎來略衣 受者如法衣
 額衆如法衣 兼仕五條 且行委 五條 加持像如法衣 大七條
 祓致像五條 受者每日當日 當耳 兼且上二面法 兼行 兼此初
 辰、時鎮守法示 九条錫杖 心經百卷 立義文 諸神
 刻限 初衣成二條 後衣外二點 一、初衣面一 後衣子一露

西部習合灌頂次第 何闍梨

先入神力妙壇再拜 取幣并
 頌曰謹上再拜、八相成道結緣始
 和光同塵利物終
 次登床 先置幣本取而後登

次中區板 次三種大板 次六根清淨板
 次十方结界 職衆讀取參 受者皆取着

次大何闍梨自後尸入
 先三礼 登礼盤

供養法 習合次第
 著座・普礼・塗香・三密觀

淨三葉・三部・祕申・加持香水
 加持供物・小三古印キ、又後六、十五古印
 降三世、明

了字觀・淨地・淨身
 觀佛・金剛起・本尊普礼

金剛持遍礼 金剛部三時那印 舒指授頂如當帶
 從心旋轉如藥盤 金剛合掌并置頂上
 唵縛日囉多囉薩縛他他識多迦耶縛記

南無八供養并 南無四攝智并
 南無金剛界 一切諸佛并
 南無大悲胎藏界 一切

次後夜偈 全丁 白衆等各念
 次廻向 全丁 取修功德水
 廻向大菩提 至心廻向
 次至心廻向 下座藏悔隨喜出之

次解界 大三尸中 火院 空廻 不勤
 四方結 也結

次撥遣 唵鉢囉尸薩怛囉總
 字 示 目 捨穆

廻向終 全丁

次三部 被甲護
 次普礼 下礼盤 次出道

○神祇訂後夜作法
 投花作法等如初夜
 大阿着小壇
 先取五胎加持五瓶
 中白可系 9 5 5
 東青3 瓶 5 5 5
 南黃3 瓶 5 5 5
 西赤3 瓶 5 5 5
 北黑3 瓶 5 5 5
 誦之加持畢置五胎
 次寶冠令著之
 次取散杖維ハタ三打之自中次第
 灑受者頂各三及咒三度
 次麗氣灌頂授次第
 同訂和室
 金剛界阿闍梨位
 師資和合印法界
 大惠刀普賢一字心

豐受皇大神三及
 師左手

誡語曰
 此法是諸神內證祕要衆生須覺
 真術汝敢向未灌頂人不說此事
 詐說之諸神令汝首破烈故經軌明
 大日如來闍迹云行如此深法行者頂
 上常恒放五智光明世間身成金色
 相好質現當成就志地未緣得度
 無疑無量諸佛未摩頂一切番迹則
 從座起納受若欲傳受此法者慎明師
 或五年或三年依上報利智者百日致
 給仕員重木積薪成劫累德可傳
 受之七珍万宝猶不足何况无器
 不信筆努不可傳得祇不傳隨
 法慳罪无器許法家冥罰可惡

天明申師卷十六寫之終
 傳燈天阿闍梨權大僧都法印天齋宗
 御流神道玉木派從第二世文濟
 法印第六世之資負
 嫩海校正了

一小且後授手師資共出小且
 大阿執赤蓋亦復受者大且
 前三礼 一說再拜
 兩說之內再拜可用

一古次第具解界檢遣無之
 欣習合次第具解界
 檢遣出
 兩說之內有ハタ可用也

檢遣真言フニハトボシテ
 次第初夜方後夜偈出然
 結願作法次大故後夜金剛
 界三次至心廻向出金剛
 界一必焚也

此度後夜斗用ベキ
 古次第後夜前讀後讀共出金
 傳法通也

今日
 一於神道灌頂宮內作法亦兩說
 有七見アリ
 天正年中古次第通受者引入後
 投花作法直入小且所次第
 通授果師資共出小且到大且
 前再拜此時諸社大事授次第
 奉拜諸神等出宮內作法也
 勿論大且三通无之白蓋赤蓋
 不用又小且所無後催授事等
 今次第作法大異也不可和會
 阿闍梨可任意慈樂也但初後
 夜授次第大途相違先之飲
 後來為用心記之耳